

「ねーシトリー。この二人を彼氏彼女にすることってできる？」

「どいつだ？」

「この二人」

ツムギがパソコンの画面に映る男女の画像を指さすと、シトリーは「可能だ」とこくりとうなづいた。

「誕生日などはどこだ」

「ここ」

「変われ」

シトリーがそう言うと、ツムギはパソコンの椅子から立ち上がり、シトリーと場所を交換した。

シトリーはヒョウの前足を人間の手に変化させると魔力の具現化である光を宿らせた。

そして画面上にある男女の写真に両手で触れながら横目で対象となる男女の生年月日と名前を言うときを這うような低い声で魔界の言葉をつぶやくと両手をパンと鳴らした。

「これでよし。一週間程度で結ばれるチャンスが来る」

「分かった。いつもありがとうね」

ツムギはシトリーと場所を交代すると、両想いになれる魔術をかけたから一週間後に結ばれるチャンスが来ると返事をした。

「シトリーいつもありがとう。おかげで私はただの占い師のはずなのに縁結びの神様とか言われちゃっている」

「俺の手にかかれば人間の縁を結ぶなど造作もないことだ」

シトリーの手はすでにヒョウの前足に戻っていて、猫がそうするように顔を洗っているところだった。

「ねえシトリー、シトリーのその能力ってどうやって手に入れたの？」

「気が付いたら身についていた。人間だけでなく、敵対するもの同士以外なら悪魔同士でも円を結ぶことができるぞ」

「へー。悪魔同士でも縁結びができるってことは、魔界にいた頃も縁結びをしていたの？」

「ああ。依頼されたら可能である限り断ってはいなかったからな。ずいぶんといろいろな悪魔の相談を受けたぞ」